様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 ３０ 日現在

機関番号：３２６２９
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2012～2015
課題番号：２４５３０９７２

研究課題名（和文）日本統治時代の台湾・朝鮮ろう学校における手話教育：ろう者への聞き取り調査を通して

研究課題名（英文）Education through Sign Language at Schools for the Deaf in Taiwan and Korea under Japanese Rule: Interview Research with Deaf People

研究代表者
佐々木　大介（SASAKI, Daisuke）

成蹊大学・経済学部・准教授

研究者番号：００４０５６４８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　4,000,000円

研究成果の概要（和文）：被験者への聞き取り調査から、日本から派遣された日本人教員を中心に教育が行なわれていたようで、被験者が教わった教員は日本人であったというケースが非常に多かったようである。授業では手話が多用されていたようであり、被験者の手話言語能力には確かなものがあった。その教育においては（書記）日本語の獲得が決して軽んじられていたということではないようである。一方、語彙比較研究に関しては、「同一」と「類似」を合わせた割合が、日台・日韓の各手話言語間で48-55%で、北朝鮮手話・韓国手話間では約56%と高かった。

研究成果の概要（英文）：A series of interview research with deaf subjects revealed that Japanese teachers who were dispatched from Japan were the core teaching staff at schools for the deaf in Taiwan and Korea under Japanese rule, and, in most of the cases, the teachers who the deaf subjects learned from were Japanese teachers. Sign language was the primary method of communication and instruction at the schools, and the subjects' linguistic competence in signing appears to be very high. However, it seems that the acquisition of (written) Japanese were not at all neglected. On the other hand, East Asian sign languages, including North Korean Sign Language, were lexically compared, the combined rate of "identical" and "similar" was 48-55% between Japanese Sign Language and Taiwan Sign Language and between Japanese Sign Language and Korean Sign Language, and it was approximately 56% between between Korean Sign Language and North Korean Sign Language.

研究分野：言語学

キーワード：手話言語学　日本手話　台湾手話　韓国手話　教育史　日本統治時代　台湾　朝鮮

１．研究開始当初の背景

市田（2002）や Nakamura（2000）などが指摘するように、日本手話、台湾手話、および韓国手話の間には語彙的な類似性を見い出すことができる。これには歴史的な背景があるとされる。すなわち、大日本帝国政府が 19 世紀末から第二次世界大戦中に行なった植民地支配により、これらの地域に何らかの形で日本手話が持ち込まれ、結果として現地の手話言語に影響を与えたと推測される。台湾の場合、大日本帝国政府による植民地支配（1895 年から 1945 年まで）の間、1915 年に台南盲唖學校が設立され、1917 年には台北に木村盲唖教養所（後に台北盲唖學校）が開設された。一方、朝鮮の場合、1910 年の韓国併合の前年、平壌盲唖學校（평양맹아학교）が開設された後、1913 年には朝鮮總督府濟生院盲唖部（조선총독부제생원맹아부、現在の国立ソウルろう学校）、1938 年には平壌光明盲唖學校（평양광명맹아학교）が開設された。

佐々木（2007a）および Sasaki（2007b, 2009, 2010a, 2010b, 2011）では、日本手話が台湾手話および韓国手話の語彙にどの程度影響を与えているか、とりわけ、「音韻的に類似」と判断される手話単語間の相違に関して、手形、掌の向き、運動、位置といった手話の主要音韻パラメターの観点から、言語学的説明を試みた。Sasaki（2007b, 2009）は、日本手話と台湾手話の語彙、日本手話と韓国手話の語彙が、それぞれどの程度類似しているか音韻的観点から比較、研究した。日本手話と台湾手話の比較では、市販の手話辞書（各手話単語はイラストレーションによって 2 次元で描写）を言語データとして利用し、Swadesh（1952）の基本語彙を応用して開発された 100 語の語彙リスト（Woodward 1978, 2000）、McKee and Kennedy（2000）の 199 語の語彙リスト、史・丁（1979）所収の 752 語の語彙リストの 3 種類を使用して比較した。また、日本手話と韓国手話の比較では、684 語の語彙リストを使用して比較した。これらの研究では、McKee and Kennedy（2000）にしたがい、上記の主要音韻パラメター（手形、掌の向き、運動、位置の 4 種）を採用して手話単語を音韻的に分析し、「音韻的に同一」（全パラメターが一致）、「音韻的に類似」（パラメターが 1 つのみ相違）、および、「音韻的に相違」（パラメターが 2 つ以上相違）という 3 種類に分類した。なお、形式が同一だが意味が相違する手話単語の対は「意味的不一致」として、また、当該の手話単語がいずれかの手話辞書に掲載されていない場合は「データなし」としてそれぞれ分類し、比較から除外した。

この結果から、3 種類の分析を通して、約 40%の手話単語は音韻的に同一、約 20%の手話単語は音韻的に類似、また、残る約 40%の手話単語は音韻的に相違しているということが全般的に分かった。歴史的・語族的に無関係である 2 手話言語間で、音韻的に同一または類似している手話単語の対が全体の 25%程度であったという研究結果（佐々木 2001、Guerra Currie, Meier, and Walters 2002）から考えると、約 60%の手話単語が音韻的に同一または類似しているという状況は注目に値するものであり、今回調査対象とした 3 手話言語が第二次世界大戦の戦前・戦中を通して歴史的にどのように影響し合い、それぞれの言語が発達・変化していったか、また、大戦後にこれら 3 手話言語がどのような独自の変化をたどっていったのかを研究することは、歴史言語学的にも社会言語学的にも非常に有意義であることが分かった。

２．研究の目的

上記に述べたこれまでの先行研究においては、言語学的観点から、日本手話が台湾および朝鮮に何らかの形で持ち込まれ、結果として台湾手話および韓国手話に影響を与えたとの推測がおおむね支持されると考えられる。しかし、その「何らかの形」がどのようなものであったのか、すなわち、台湾および朝鮮の盲唖学校でどのような教育が行なわれていたのかは、これまでの文献調査では断片的にしか分かっていない。

例えば、台湾の場合、台北盲唖學校には東京聾唖學校から、台南盲唖學校には大阪市立聾唖學校から、それぞれ教師が派遣され、今日台北方言と台南方言が観察されるきっかけとなったと、Smith（1987）は述べているが、趙玉平（2004）が著わした『手語大師 4：台灣手語完全學習手冊之專業篇聾唖學校』には、台北盲唖學校には東京聾唖學校からだけではなく、大阪市立聾唖學校および名古屋市立聾唖學校からも教員が派遣されたと書かれている。一方、朝鮮の場合、大正 4 年（1915 年）版『朝鮮総督府施政年報』には「教授上内地ト同式ノ點字又ハ手話ヲ用フ」との記述があり、また、『朝鮮社会事業』9 巻 7 号（1931 年）には、当時の朝鮮總督府濟生院盲唖部長の知覧芳之助が「朝鮮總督府濟生院の事業」で「教授の方法は手話法に重きを置き口話法を加味せり」と述べているが、教員が教室で生徒を前にしてどのように教育を行ない、また、手話がどのように使用されていたのかは不明である。

本研究代表者が平成 18 年度～平成 20 年度に科学研究費補助金を受けた研究（若手研究（B）、課題番号：18720109）では、台湾および韓国において現地調査を行ない、日本統治時代の盲唖学校に在籍していた高齢のろう者（75 歳以上）から言語データの収集を行なった（台湾 5 名および韓国 2 名の計 7 名）。平成 18 年度の研究の目的は、本研究の目的とは異なっていたため、当時の盲唖学校ではどのように教えられていたかについては詳しく尋ねてはいないが、「私は田中先生という先生に教わった」という台湾人ろう者の言及や、「当時は手話クラスと口話クラスに分

かれており、それぞれ生徒数は 16 名ぐらいであった」という韓国人ろう者の言及を得ることができた。

日本統治時代の台湾および朝鮮の盲唖学校において、どのような教育が行なわれていたのかが文献によってほとんど分かっていない以上、それを追求するには、その時代の盲唖学校を経験した高齢のろう者からの聞き取り調査によって明らかにするよりほかにない。

したがって、本研究においては、日本統治時代の台湾および朝鮮における盲唖学校において、どのような教育が行なわれていたかを明らかにすることを目的とする。当時の盲唖学校に通っていたろう者を中心に聞き取り調査を行ない、盲唖学校において日本手話がどのように導入されていたのか、教員はどの程度手話を使用した教育を行なっていたのか解明することを最終的な目標とする。

併せて、言語学的観点から、日本手話の影響があるとされる台湾手話および韓国手話、韓国手話から分岐したと考えられる北朝鮮手話との語彙比較研究を行なう。

３．研究の方法

「研究の目的」で上述したように、本研究の目的は、日本統治時代の台湾および朝鮮の盲唖学校においてどのような教育が行なわれていたのか、とりわけ、盲唖学校において手話による言語教育がどのように行なわれていたのかを、当時の盲唖学校に通っていたろう者に対して聞き取り調査を行なって、明らかにすることである。聞き取り調査をする被験者は、台湾手話または韓国手話を母語とする手話使用者である。いうまでもなく、手話言語は視覚および空間を使用する言語である。したがって、ろう者からのデータの収集は、ビデオ収録によって行なう。

ろう者への実際の聞き取り調査については、「通っていた盲唖学校においては、手話による言語教育がどのように行なわれていたのか」というような明確すぎる質問では、かえってどのように答えてよいのか当惑してしまう場合も考えられる。本研究で知りたい内容は、すでに 65 年以上も以前のことであり、すぐにその当時のことを思い出して語ってもらうのは困難であると考えられるからだ。本研究における聞き取り調査では、ろう者にリラックスした雰囲気の中で答えてもらえるよう、基本的に盲唖学校時代の思い出話をざっくばらんにしてもらうという形式を取る方が、むしろ得策であると考えられる。当時の遊びの話などから思い出してもらい、昔のことが徐々に思い出されていって話が弾んでいくようにする必要があると思われる。

聞き取り調査をするインタビュアーについては、台湾手話および韓国手話が母語ではない研究代表者が手話を使用してインタビュアーを務めると、被験者に何らかの悪影響が及んでしまう可能性がある。本研究においては、インタビュアーを現地のろう者に務めてもらい、上記のような影響が及ばないようにする。また、聞き取り調査は、被験者とインタビュアーの１対１で行なう必要は決してなく、被験者が複数人いる方が被験者同士の話が弾みやすくなるので、さらによいデータが収集可能となると考えられる。

聞き取り調査をする人数についてであるが、被験者となるろう者が高齢であるため、多数を集めることは困難であると想像される。しかし、本研究代表者が平成 18 年度～平成 20 年度に科学研究費補助金を受けた研究（若手研究（B）、課題番号：18720109）では、台湾人の高齢ろう者 5 名、韓国人の高齢ろう者 2 名からデータを収集した実績がある。これらのろう者を中心に、いわば「芋づる式」に被験者となり得るろう者を集め、各国につき最低 10 名の高齢ろう者からデータを収集することを目標とし、もし可能であれば、それ以上の高齢ろう者からデータを収集できればと考えている。

併せて、高齢ろう者への聞き取り調査においては、これまでの研究で実施された手話語彙の調査も実施し、これまでに発刊された日本手話、台湾手話、韓国手話の手話辞典、および、朝鮮戦争後に分断した朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）の手話辞典『손말사전』（手話辞典、2005 年発刊）を含めた語彙比較研究を行なう。

４．研究成果

台湾においては中華民國聾人協會に、韓国においては한국농아인협회（韓国聾唖人協会）、서울특별시농아인협회서울수화전문교육원（ソウル特別市聾唖者協会ソウル手話専門教育院）および영락농인교회（永楽ろう者教会）などに、それぞれ協力を要請し、本研究に協力していただける高齢ろう者を紹介していただいた。

当初の予定では、各国につき最低 10 名の高齢ろう者からデータを収集することを目標としていたが、本研究の被験者となり得る存命の高齢ろう者の数は予想以上に少なく、聞き取り調査ができた高齢ろう者の数は、各国とも一桁台にとどまる結果となった。しかしながら、台湾においては、当時 83 歳のろう者夫妻から聞き取り調査をすることができ、また、韓国においては、当時 93 歳のろう者男性から聞き取り調査をすることができた。

被験者がかなり高齢で体力面での不安等あったため、聞き取り調査には十分な時間を取ることがままならない状況もあったが、被験者への聞き取り調査をまとめると、日本から派遣された日本人教員を中心に教育が行なわれていたようで、被験者が教わった教員は日本人であったというケースが非常に多かったようである。また、授業では手話が多用されていたようであり、被験者の手話言語

能力には確かなものがあると感じられた。被験者の手話発話には音声が同期して発せられるということがなく、現代のろう教育で強調される口話教育に重きが置かれていなかったからではないかと推測される。ただし、その教育においては（書記）日本語の獲得が決して軽んじられていたということではないようである。実際、研究代表者と被験者がコミュニケーションを図る場面において、被験者が日本語でメモを書いて説明をするということもあり、戦後 70 年以上という年月を経ても、日本語で意思の疎通が図れるということは、当時の教育には（書記）日本語の獲得が大きな柱であったと考えることができる。

語彙比較研究に関しては、手形、手の平の向き、運動、位置といった音韻的パラメターを用いて分析を行った。日本手話・台湾手話間、日本手話・韓国手話間、台湾手話・韓国手話間のそれぞれについて、「同一」「類似」「相違」と判断された割合は以下の通りであった。

	同一	類似	相違
日・台	38.1%	17.3%	44.6%
日・韓	35.7%	12.5%	51.8%
台・韓	17.4%	20.9%	61.7%

「同一」と「類似」を合わせた割合が、日本手話・台湾手話間および日本手話・韓国手話間で 48-55%と高い割合になっているのは、日本手話が台湾手話および韓国手話に語彙的な影響を及ぼしたと考えられるためである。一方、台湾手話・韓国手話間についてこの割合がここまで高くなっていないのは、台湾手話および韓国手話が互いに影響を及ぼし合う関係ではなかったことを意味すると考えられる。また、台湾手話および韓国手話には、古い日本手話の特徴が残っていると考えられ、これは台湾手話および韓国手話における「保守性」が原因ではないかと考えられる。

また、手話辞典を使用した語彙比較研究においては、北朝鮮手話・韓国手話間、北朝鮮手話・日本手話間のそれぞれについて、「同一」「類似」「相違」と判断された割合は以下の通りであった。

	同一	類似	相違
北・韓	34.2%	22.4%	43.4%
北・日	21.1%	23.7%	55.3%

「同一」と「類似」を合わせた割合が、北朝鮮手話・韓国手話間で約 56%である一方、北朝鮮手話・日本手話間で約 45%となっているが、これは、確かに日本手話は朝鮮半島で使用されていた手話に影響を及ぼしたとは考えられるものの、韓国手話から分岐したと考えられる北朝鮮手話に対して日本手話が直接的な影響を及ぼしたことではないので、北朝鮮手話・韓国手話間での割合の方が高くなっているということを意味すると考えられる。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計 4 件）

(1) Sasaki, Daisuke (2013a). “North Korean Sign Language: A First Study”. Paper presented at the 3rd International Conference on Sign Linguistics and Deaf Education in Asia, The Chinese University of Hong Kong, Shatin, Hong Kong SAR, January 30, 2013.

(2) Sasaki, Daisuke (2013b). “North Korean Sign Language: A Possible Influence from Korean and Japanese Sign Languages”. Poster presented at the Eleventh International Conference of the Theoretical Issues in Sign Language Research (TISLR 11), The University of London, London, United Kingdom, July 12, 2013.

(3) 佐々木大介 (2014). 「北朝鮮手話について」. 日本手話学会第 40 回大会, タワーホール船堀, 2014 年 11 月 1 日

(4) Sasaki, Daisuke (2016). “The Lexical Influence of Japanese Sign Language on Taiwan and Korean Sign Languages: Data from Taiwanese and Korean Deaf Signers”. Poster presented at the Twelfth International Conference of the Theoretical Issues in Sign Language Research (TISLR 12), Melbourne Convention Centre, Melbourne, Australia, January 4-7, 2016.

〔図書〕（計 1 件）

(1) 佐々木大介 (2014). 「手話教育におけるコミュニカティブな授業の試み」. 上智大学 CLT プロジェクト（編）『コミュニカティブな英語教育を考える：日本の教育現場に役立つ理論と実践』, pp. 74-77. 東京：アルク.

６．研究組織
(1) 研究代表者

佐々木　大介（SASAKI, Daisuke）
成蹊大学・経済学部・准教授
研究者番号：00405648